

お客様満足度が向上する ハイブリッドアジャイル

アジャイル手法を日本の大規模システム開発に最適化

日立ソリューションズ
技術開発本部 生産技術センタ
担当部長(チーフITアーキテクト)

アジャイルの匠
英 繁雄



Shigeo Hanabusa

「大規模な企業システムに アジャイルは適用できない」は誤解

「大規模な企業システムにアジャイルは適用できない」「アジャイルではプログラム開発の進め方が、カウボーイコーディングとなってしまう、開発現場を統制できなくなる」といった見方は完全な「誤解」である。

アジャイルは、開発のスピードアップやコスト低減のための手法のように思われるが、何も考えず、とりあえずという感じで始めると多くが失敗する。従来のウォーターフォール型開発より、ともすればプロセスの中でどうプラクティスを回していくかについては、より綿密に計画を練らなくてはならない。

反復、レトロスペクティブ、ペアプログラミング、テスト駆動開発、リファクタリング、継続的インテグレーションといったさまざまなプラクティスがアジャイル開発では重視される。しかし、こうしたプラクティスの導入自体が目的化してしまうと意味を失う。あくまでもプロジェクトに合った効果的なプロセスを実施する視点から取り組まなければならない。アジャイルプロセスの実施が目的ではなく、プロセス改善を実施するのだ。アジャイルは本来、プロジェクトをしつかりと統制しながら進める開発手法であり、周到に準備して取り組みれば、大規模案件にも対応可能だ。

アジャイルとウォーターフォール、 それぞれの利点を組み合わせる

私たちは、欧米のシステム開発におけるアジャイル実践例を調査する中で、これを価値観や商習慣、職場事情などが異なる日本の開発現場に、そのまま直輸入しただけでは、必ずしも大きな効果が得られないということに気づいた。

海外事例では、要件定義工程からアジャイルプロセスで行うケースが見られるが、日本のエンタープライズシステムの受託型プロジェクトは概算費用の承認があるため、要件定義が曖昧なままアジャイルで行うのは難しい。基本設計を固め、全体の規模が見えてからアジャイルで開発し、テスト工程につなげる。すなわち、ウォーターフォールでアジャイルを挟み込むやり方が向いていると考えた。アジャイルを、日本の大規模システム開発の現状にフィットさせたこのモデルを、私たちは、「ハイブリッドアジャイル」と呼んでいる。

ただし、開発期間を短縮したいのか、お客様にどう見せるのかによって採用するプロセスは異なる。アジャイルの俊敏さを旨とする軽量なプロセスと、大規模案件で脈々と培われてきたウォーターフォールモデルの利点とを融合させることが重要だ。つまり、お客様やプロジェクト、あるいは工程によって、ウォーターフォールとアジャイルの組み合わせ方を変えていくことで、効率化

とコスト削減、品質向上が達成できるのだ。

そして、アジャイルに取り組む一番のメリットは、お客様の満足度が高まることだと私たちは考えている。実際に動くものを確認しながら開発が進むため、お客様の安心感や満足度は向上する。また、アジャイルのプラクティスの中には、チケット管理やテスト駆動開発など、ウォーターフォールより管理が厳しい手法がたくさんある。チケット管理によりチーム全体のスケジュールが見える化されることでリスク回避につながる点も満足度を高める一つの要因だろう。

私たちは、個々のプロジェクトに応じたさまざまなバリエーションのハイブリッドアジャイルを提案し、今後もお客様の満足度が向上するシステム構築を進めていきたいと考えている。

『ハイブリッドアジャイルの実践』



著者:株式会社日立ソリューションズ
英 繁雄、奈加 健次、平岡 嗣晃、前川 祐介
発行:株式会社リックテレコム

事例に基づき、マルチベンダー、請負開発という体制の大規模アジャイル開発におけるアジャイルプロセスの導入の仕方や、プロジェクト管理のポイントを解説編と実践編に分けて紹介しています。